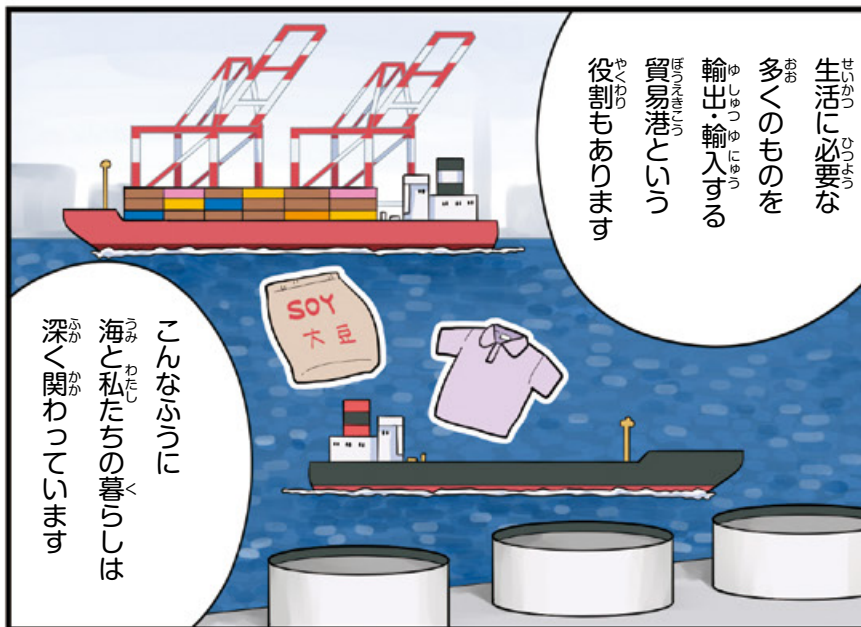
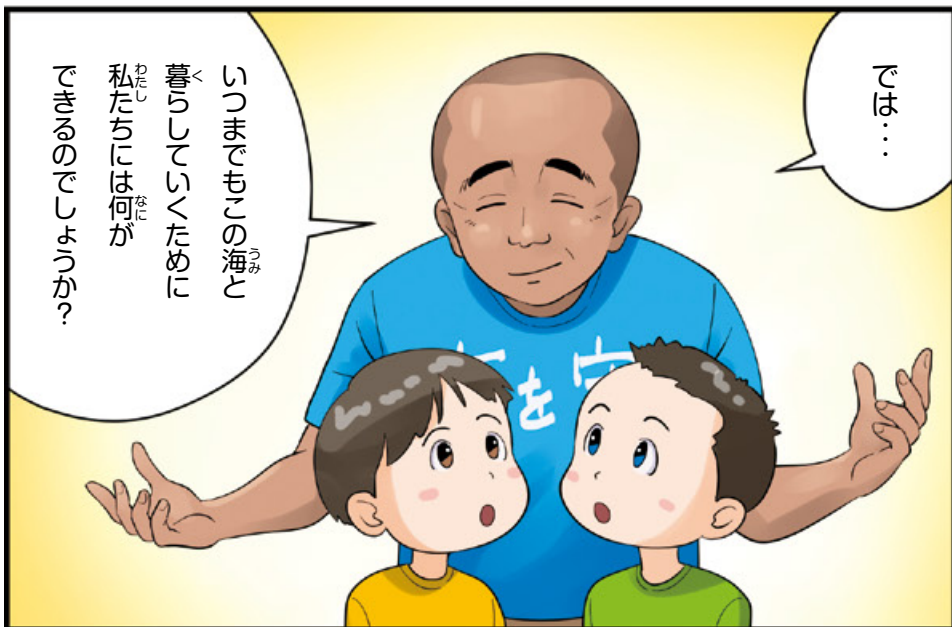
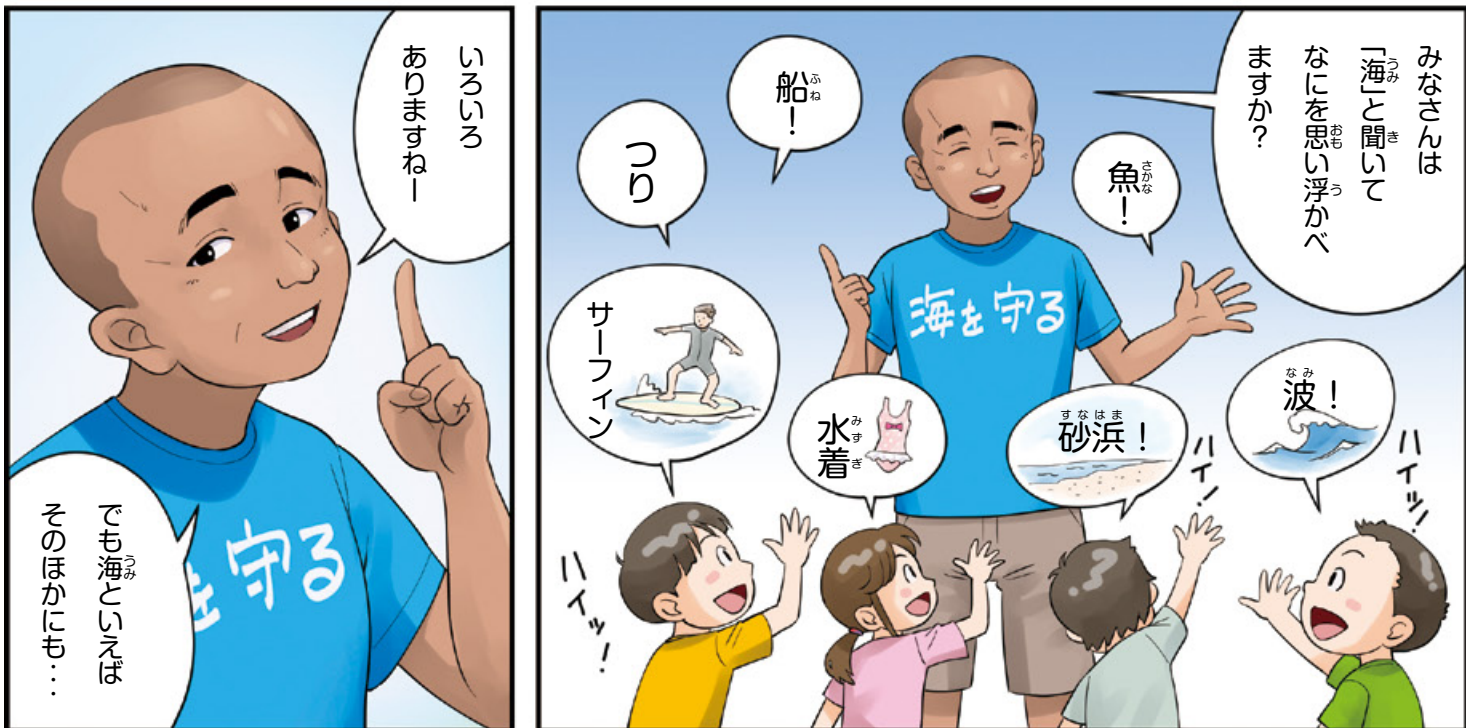
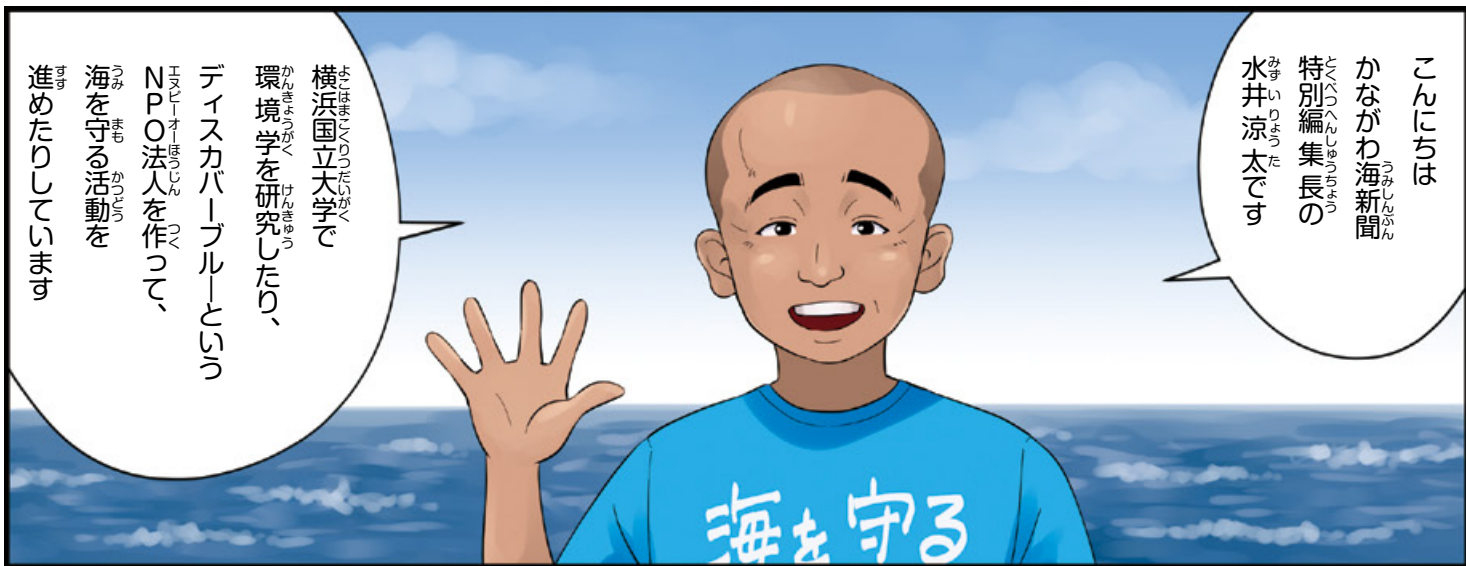


かながわ海新聞

2022(令和4)年9月発行





真鶴半島から見る太平洋はすごくきれいだっ



相模湾に突き出した真鶴半島。森林の樹木の下には美しい磯が広がり、陸にも海にも豊かな自然が残るエリアです(写真提供: 神奈川新聞社)

アザラシの海



海新聞の特別編集長・水井涼太さんは海のことを教えてくれる団体ディスカバーブルーの代表だ

真鶴半島をふくむ真鶴町の面積は7・05平方キロメートルで、川崎市の約20分の1。県内で2番目に小さな町です。でも真鶴の海はとてきれいだ。石がゴツゴツしていて、そこにしおだまりができて、生物もたくさんすんでいます。もちろん生物だけではなく、人も開かれて、観光客もたくさん来ます。夏は、海水浴や生

真鶴 火山がつくった真鶴半島
相模湾は丸くきれいな海岸線ですが、神奈川県のはじっこで海に突き出た場所があります。それが真鶴半島です。真鶴半島は、約15万年前に箱根火山の溶岩が湧き出てできた。鶴の首と頭のような形なので真鶴という地名になったよつです。真鶴半島をふくむ真鶴町の面積は7・05平方キロメートルで、川崎市の約20分の1。県内で2番目に小さな町です。でも真鶴の海はとてきれいだ。石がゴツゴツしていて、そこにしおだまりができて、生物もたくさんすんでいます。もちろん生物だけではなく、人も開かれて、観光客もたくさん来ます。夏は、海水浴や生

真鶴 真鶴のプランクトン
真鶴半島の先っぽの三ツ石海岸は美しい磯です。岩場を歩くと大量のフナムシが逃げていきます。岩の下には生物がたくさんいました。ナマコがなん種類もいることを知りました。ガンガゼやウツボなど危険な生物がいることも知りました。でも一番興味をもったのは浮遊生物のプランクトンです。プランクトンには、植物プランクトン、動物プランクトンの2種類ありますが、どちらも自分で泳ぐ生物はほとんど泳げません。海の流れて逆らえるくらい自分で泳げる生物はネクトンといえます。また底生生物はベントスといえます。海の底で生活している貝やエビ、

カニなどです。夏の海がにこって見えるのは、実は、汚れているのではなく、プランクトンが増えてるせいなんです。(山岸柚葉記者・5年)



海水の中にはプランクトンがたくさんいる



プランクトン採取用の網を海に投げる



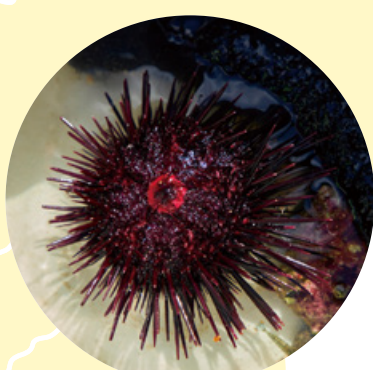
顕微鏡で見ると……



プランクトンが見える。動いている



磯の石をうら返すと生物がたくさんいた



赤っぽく見えるけどムラサキウニ

かながわのはじっこ



世界とつながる川崎港。自動車や化学品を輸出し、液化天然ガス(LNG)や原油などを多く輸入しています(写真提供: 神奈川新聞社)

川崎市役所港湾局の末繁泰弘さんに川崎港の今と昔の姿を教えてくださいました



展望室の床には川崎港の写真が広がっています



巡視船で案内してくれた、川崎市役所港湾局の加藤利明さん



展望室からは川崎港が見わたせる。双眼鏡は無料

川崎 世界とつながるコンテナターミナル
コンテナターミナルとは、世界各国から船で運ばれてき

「日本も負けていられない」と思いついて、始めたそうなんです。現在の埋め立て地の広さは約20・76平方メートルで、約2400の事業所(工場や倉庫)があり、約6万3000人が働いています。しかし住人はほとんどいません。その理由は、川崎港は貿易などをする港にするため、家やマンションを建ててはだめだと言律で決めたからです。(小河原李枝記者・6年)

たコンテナをガントリークレーンで運ぶ場所です。コンテナの中身はなにが入っているのかわからない。おもに、冷凍食品や衣類、くだもの表などです。ガントリークレーンは、高さ100メートルある大きな機械ですが、運転手はたった1人で、2時間交代で働きます。女性でガントリークレーンを操作できる人は、日本にはたった2人しかいないそうです。(西尾風花記者・5年)



これがコンテナターミナルだ。横浜スタジアム約7個分の広さ



40フィートの冷凍用コンテナ。長さ約12m



コンテナを船から直接移動させるガントリークレーン

2つの海



岩ガキの貝殻

岩ガキとは

冬に売られるのがマガキで、夏においしくなるのが岩ガキです。マガキよりゆっくり成長し、大きく育ちます

真鶴 巨大な岩ガキの秘密
真鶴では岩ガキの養殖がさかんに行われます。真鶴のカキは子どもの運動づくらの大きさがあり、「鶴宝」と呼ばれています。鶴宝は高級なブランドカキです。食べたことはありませんが、クリーミーで甘いそうです。



(写真提供: ディスカバーブルー)



(写真提供: 真鶴町岩ガキ養殖事業推進協議会)

真鶴 海ブドウを新名物に

ぼくも海の生物を大切にするといい願いをいつかかなえたいと思っています。(上村太魁 増記者・5年)

真鶴の夏の海の水温は、26℃から28℃と海ブドウを育てやすいので、約5年前から海ぶどうの養殖が研究されています。

まだ売られていない真鶴の海ブドウを食べさせてもらいました。味は、しょっぱく、ぬるぬる、つぶつぷしてました。イクラと似ていてお米とあいそつです。



これが海ブドウ。小さいけどブドウのように実がついている

海ブドウとは

海藻の一種で、ブドウの房の形に似ています。プチプチとした食感で、あたたかい海でしか育たず、収穫も手作業なので貴重な食材です



試食する記者「海ブドウは初めて食べる」

来年にも商品化できそうだが、岩ガキに続く新名物として期待されています。海ブドウは、海で育ててしまつとプランクトンの中の悪い成分が入ってしまうかもしれないため大きな水槽で人工海水を利用して育てるそうです。みんなの食卓に真鶴の海ブドウが出るのが待ちどおしいです。(松岡龍記者・5年)



「人と自然の共生が未来につながる」と話す 柴山さん

✔ 昔1人の男性が働きかけたことが今の私たちの生活を良くしたように、私たちの行動も良い未来を作れるかもしれません。だから、海を守るために、これから海の様子を色々な人に伝えたり、海に落ちているゴミをひろったりしたいです。

(山本涼花記者・6年)

ずっと海と暮らすために
いつまでもこの海と暮らしていくために最も大切なことは、海と触れ合う機会を増やすことだと思います。具体的には、学校行事で小学生が年に2回、海に触れる機会を作る。できれば3年生ぐらいから始めた方がいいと思います。

なぜ、学校行事で行うべきかと言うと、興味を持つ人だけが行くとなると、触れ合う人が限られてしまうからです。しかし、学校行事となると興味がない人でも海に行くので、関心をもってもらえるかもしれないからです。

次に、そこにはかない特産品を開発してお客さんを集めることです。例えば真鶴は、国内では沖縄でしか作られていない海ブドウを開発しています。このように地域の特産品を作ること



(豊田航大記者・6年、本田晃朗記者・5年)

で「海と触れ合う機会を増やす」ことに繋がると思います。

わたしたちは何ができる？
次に大切なことは、人間が地球の環境を破壊しないように気をつけて生活することです。例えば二酸化炭素を出さないようにすることが大切です。

またペットボトルやマスフ、カンなども捨ててはいけません。ペットボトルはずっと水にうかんでいるだけでだんだん小さくなって魚がプランクトンだと思つてまちがえて食べてしまうからです。

川崎 埋め立て地に砂浜があるの？

川崎市の埋め立て地にある7つの島の1つ、東扇島の東公園に人工の砂浜があります。2008(平成20)年に人工海浜ができると人がおしか



川崎の浜でひろったなぞのトゲトゲ

が休めるそうです。改善してもらいたいのは、泳げるようにしてほしいのと、3倍くらいに広くしてほしい所です。それから、海

川崎の海も真鶴の海も、今と昔では地形も産業もなじではありませんでした。では、これからは？ ふたつの海で続けられているそれぞれの取り組みを調べてみました。

それぞれの取り組み



の中のコンブや魚をふやしてほしいです。せっかく海に行っても泳げないと子どもは海に行つた気になれません。また混雑すると、きゅうくつになってしまいます。

川崎 泳げる海にするために

自由に泳げる海にしてほしいので、具体的にどんな対策をしてほしいかあげていきます。泳げる海にするため、あぶなと思ったのは小さな枝です。はだしで海に入るとふんだけをしてしまいます。

2つ目はクラゲなどのきけんな生物です。砂浜を歩いている時、うちあげられたクラゲがいました。死んでいましたが、こういう生物がいると安心して泳げないので対策してほしいです。

自由に泳げるようにすると、海にくる人が増えると思います。まだ海に来たことのない子どもが楽しむためにも、人工海浜で自由に泳げるようにしてほしいです。(平野義仁記者・5年、千田凜記者・6年)

ディスカッションしよう！

水井特別編集長から最後のメッセージがありました。

「私が運営しているディスカバーブルーは、いつでもこの海と暮らしている世の中をつくるためにがんばっています。3日間の取材を通して、みなさんはどんなことができると思いましたか？」



海の生物が変わっている！
私が真鶴の今と昔を知つて一番興味を持ったことは、真鶴の海の生物が昔と変わってきているということです。

例えば、昔は真鶴にいなかったサンゴが増えてきたりしています。その原因は、水があたたかくなったことです。そのため、元々はもっとあたたかいところに住んでいたサンゴや生物が真鶴でもくらすことができる様になってきているのです。

その中には、困ることを引き起こすものもあります。

その例がアイゴです。アイゴはおいしい坊なので、周辺の海藻を食べつくして「磯焼け」を引き起こしてしまっています。このこともふくめて、地球があたたかくなつてしまつ地球温暖化を止めたいと思いました。

(江頭璃乃記者・5年)

行動が未来を変える

今回、一番おどろいたのは、川崎港の埋め立てについてです。なぜなら川崎で最初に埋め立てを始めたのがたった1人の人だったからです。



その人、浅野総一郎さんは、なぜ埋め立てを始めたのか？それは外国の港を見て「私たちが負けられない」と思ったからだそうです。こうして浅野さんの声から始まった埋め立てのおかげでいまの川崎港があり、コンテナターミナルができて、私たちの生活にとっても役立っています。

かながわ海新聞とは…

かながわ海新聞は、「海と日本プロジェクトin かながわ」の取り組みで「かながわ海新聞ちびっこ記者になろう」イベントに参加した17人の小学生が取材して、記事を書いて、みんなで作った新聞です。

「海と日本プロジェクトin かながわ」は、日本財団が推進する「海と日本プロジェクト」の取り組みの一環として行っています。



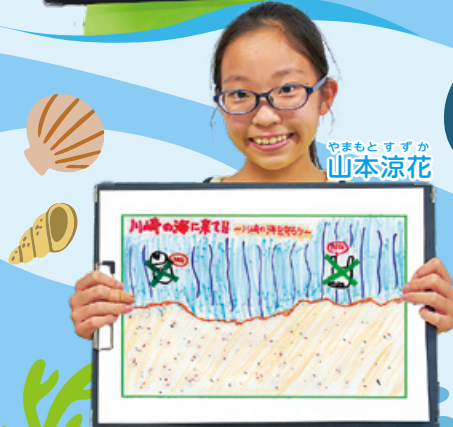
くわしくはこちら



おがわりりお 小河原李桜



ほりかわりみお 堀川美央



やまもとすすか 山本涼花



にしおふうか 西尾風花



えがしらりの 江頭璃乃



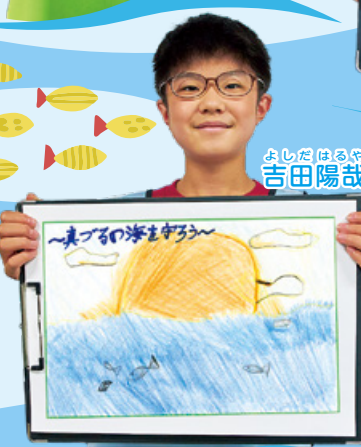
やまざしゆすは 山岸柚葉



なかまけいと 中嶋啓人



むらせこうた 村瀬孝太



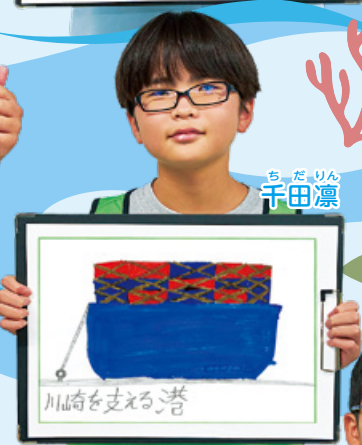
よしだはるや 吉田陽哉



ほんだかい 本田權



とよだこうた 豊田航大



ちだりん 千田凛



うえむら たける 上村太魁瑠



ほんだひろのり 本田汎矩



まつおかりゅう 松岡龍



ひらのよしと 平野義仁



ほんだこうさく 本田昊朔



日本財団「海と日本プロジェクト」について

さまざまなかたちで日本人の暮らしを支え、時に心の安らぎやワクワク、ひらめきを与えてくれる海。そんな海で進行している環境の悪化などの現状を、子どもたちをはじめ、全国の人が「自分ごと」としてとらえ、海を未来へ引き継ぐアクションの輪を広げていくため、オールジャパンで推進するプロジェクトです。

海と日本PROJECTが推進する5つのアクション

海を学ぼう！

海を学ぶとは、「海と自分とのつながり」を感じることに。



海をキレイにしよう！

海をキレイにするとは、出会いと喜びを創造すること。



海を味わおう！

海を味わうとは、海の恩恵に深く感謝すること。



海を体験しよう！

海を体験するとは、海の感動を分かち合うこと。



海を表現しよう！

海を表現するとは、海から創造する力を手に入れること。

